

〔資料〕

史料紹介 新出の元田永孚書翰について

三 澤 純

An Introductory Essay. of the unpublished Nagazane Motoda's Letters.

Jun MISAWA

要旨

本稿において、筆者は、「安場男爵家文書」（熊本大学附属図書館寄託「永青文庫細川家文書」と題された写本から、安場保和宛元田永孚書翰四点、下津休也宛元田永孚書翰一点、元田永孚意見書一点、合計六点の史料紹介を行った。これらの史料は、全て未発表のものであり、特に元田と安場とが日本近代史上に果たした巨大な足跡からして、大きな研究価値を有していると考えられる。

本稿作成過程における厳密な年代比定の結果、下津宛書翰が一八八〇（明治十三）年である以外、全ての史料が一八七四（明治七）年に書かれたものであることが判明したが、この年は、佐賀の乱、台湾出兵等の大事件が起こっている年である。今回、紹介した書翰からは、これらの事件に対して、元田と安場とが、二人の郷里・熊本の政治情勢に大きな関心を持ちつつ、自らが属するいわゆる実学連の今後の動きを模索していることを読みとることができて興味深い。紙数の都合上、最小限の書誌的知見を整理したほかは、解題の類を一切省略したが、これについては今後の課題とする。

キーワード 元田永孚、安場保和、書翰と意見書、永青文庫細川家文書

ここに紹介する新出の元田永孚書翰五通は、熊本大学附属図書館寄託「永青文庫細川家文書」のうち、「安場男爵家文書」（無番号）と題された冊子に収録されているものである。史料紹介に入る前に、これらの書翰に関する書誌

的情報を整理しておきたい。

(1)「安場男爵家文書」の性格とその史料価値

この冊子は、侯爵細川家編纂所がその活動の一環として、安場家を訪れ、関連史料を筆写した際に作成されたものと考えられる。永青文庫には、この時に一緒に作成された冊子が数点確認されるが、この冊子は安場家所蔵文書に含まれていた元田永宇関連史料をまとめたものである。細川家編纂所の主要な任務は、『肥後藩国事史料』を編纂・刊行することであったが、これは次のような二つの段階を踏み、長い時間をかけて準備されているため、いつ頃の時期にこの冊子が作成されたのかは判然としない。

『肥後藩国事史料』は、「宮内大臣の令達」²により、その編纂事業が開始され、一九一三（大正二）年七月に、『熊本藩国事史料』と合わせて三七巻が完成、宮内省に献納されている。その後、一九一七（大正六）年春から、「史料として、未だ尽さざる所あり」という認識の下、補充・改訂作業が施され始め、一九三一（昭和六）年に『改訂肥後藩国事史料』全一〇巻（一九三二年、侯爵細川家編纂所）が刊行されている（以下、これらを総称して「国事史料」と略記する）。安場家文書は、横井小楠の弟子として、いわゆる肥後実学党の中心人物となり、熊本藩の明治三年藩政改革前後から廃藩置県までの時期には、維新政権と藩政府とを結ぶパイプ役として大活躍した安場保和（一八三五年生、一八九九年没。なお廃藩置県後は、福島県令・愛知県令・元老院議員・福岡県令・貴族院議員・北海道長官等を歴任）に関わる文書であり、『改訂肥後藩国事史料』は、特に明治以後の部分において、これを縦横に活用している。

しかし、次に示す二つの理由から、この冊子に収録された諸史料は、これまで調査・研究に利用されることなく、文庫内で眠り続け、結果としてその史料価値を著しく高めることになった。

第一の理由は、「国事史料」の守備範囲が、「嘉永六年六月より、明治四年七月まで」³、即ちペリー来航から、廃藩

置県までと設定されたことである。おそらく細川家編纂所が安場家文書を調査した際には、細かい年代考証を行う時間的余裕はなく、広く幕末維新期に関わりそうだと判断された史料が、内容毎に筆写され、冊子に仕立てられていったと考えられるから、この冊子に収録された元田永孚書翰（一八七四〔明治七〕年が四通、一八八〇〔明治一四〕年が一通）は、「国事史料」編纂過程における詳細な検討の中で、収録対象史料から外されていたのである。

第二の理由は、安場家文書本体が、第二次世界大戦中の空襲によって、当時これを保管されていた清野謙次氏宅が消失した際に一緒に焼失してしまい（安場保吉氏のご教示による）、残念ながら現在では伝えられていないことである（但し、永青文庫内の数種の写本のほかに、国立国会図書館所蔵「安場保和文書」、東京大学法学部所蔵「安場保和文書」の存在が知られている）。安場家文書の中には、安場保和の履歴からして当然、日本近代史研究にとって貴重な史料が数多く含まれていたと思われるが、その一部が『安場咬菜・父母の追憶』（一九三八年刊）編集に用いられ、本文中に引用・紹介されている以外は、今日では全く目にするには叶わないのである。永青文庫蔵「安場男爵家文書」が写本であり、しかも「国事史料」編纂材料として有益だと判断されたもののみの写しとは言え、高い史料価値を有する根拠はここにある。

（2）「安場男爵家文書」の内容と元田研究への寄与

「安場男爵家文書」中には、以下の八つの史料が、以下に示す順序で筆写されている。なお、後掲の史料紹介部分では、いくつかの考証を経た上で、年代・宛先・差出等の比定を行い、時系列に沿って掲載しているが、ここでは敢えて原史料のままを記す。

① 宛先・差出・日付とも不明の書翰

②（年欠）十二月十三日付「安場賢兄」宛「永孚」書翰——→本稿における史料〔五〕

③（年欠）四月二日付「安場賢兄」宛「東野」書翰——→同右〔一〕

④（年欠）四月十七日付「安場賢台」宛「東野」書翰 → 同右〔四〕

⑤（年欠）十二月十三日付「蕉雨尊大人」宛「永孚」書翰 → 同右〔六〕

⑥（年欠）四月六日付「安場賢台」宛「永孚」書翰 → 本稿における史料〔三〕

⑦（年欠）三月付「東臯」意見書 → 同右〔二〕

⑧宛先・差出・日付とも不明の書翰

このうち、本稿において紹介するのは、②③④⑤⑥の五点の書翰と⑦の意見書とで、差出は全て元田永孚、宛先は②③④⑥が安場保和、⑤が下津休也、⑦は宛先の表記が無い。

本稿では、元田永孚の紹介を一切省略するが、これらの史料は、海後宗臣・元田竹彦編『元田永孚文書』全三卷（一九六九～七〇年、元田文書研究会）や、沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』（一九八五年、山川出版社）に代表される従来までの元田関連の史料集には未収録のものであり、先述した諸事情（特に安場家文書の焼失）によって、今回初めて公開されるものである。

元田の書翰を集中的に集めているのは、前掲『元田永孚関係文書』であるが、これには安場宛の書翰が二通、下津宛の書翰が八通収められており、今回紹介するそれぞれの書翰の内容的重要性はもとより、これら関連史料との突き合わせによって新たに浮き彫りにされる諸事実は数多い。そしてこのことは、これらの史料が元田の人物研究についてはもちろん、日本近代の歩みに元田が残した足跡の大きさからして、日本近代史についても寄与するところが大きいことを意味している。

また、⑤の下津休也宛書翰がなぜ安場家に存在していたかについては一言しておかなければならないだろう。あくまでも推測に過ぎないが、本文中で元田が、「御他見者堅ク御断申上候」と述べているにもかかわらず、下津がこの書翰を、郵送ないし使者に持たせる等の手段で、安場に送り、そのままそれが返却されないまま安場家に残ったのではないだろうか。もっとも元田・下津・安場各家には、姻戚関係を含めて密接な交流があり、下津が安場にこの書翰

をみせることは、元田が強く警戒する「他見」には該当しなかったのかもしれない。

最後に、本来ならば、①⑧も含めて、永青文庫蔵「安場男爵家文書」全体を紹介すべきところ、確実な考証を行い得た五点のみを優先して紹介することにしたことを付言しておく。

(3) 紹介にあたっての凡例

○旧字体は新字体に改め、句読点を付した。

○原史料には、「見せ消ち」が確認されるが、これは細川家編纂所が安場家文書を筆写した際のものと考えられるので、表記しなかった。

○表記上の体裁は、全て沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』に準拠した。

註

(1) 例えば表紙に「小楠横井先生手翰」(草稿本の部85頁)と記された史料がこれに当たる。但し、この表題は正確とは言い難く、一丁目に「咬菜軒逸事」と記されているように安場の伝記となっている(その中に安場宛横井小楠書翰が含まれている)。後述する「安場咬菜・父母の追憶」と重なる部分も散見されるが、両者の関連性については現段階では不明である。しかし『改訂肥後藩国事史料』には、「安場男爵家文書」「小楠横井先生手翰」収録史料以外の、安場家文書も多用されているので、細川家編纂所が作成した安場家文書筆写本は他にもあったと考えられる。

(2) (3) (4) 『改訂肥後藩国事史料』巻一「緒言」。

(5) どちらも筆者未見であるが、安場保吉氏によれば、国立国会図書館所蔵「安場保和文書」は、明治中期に安場が品川彌二郎・佐々友房らに宛てた書翰類が中心で、東京大学法学部所蔵「安場保和文書」は、明治中期の法律・経済・北海道開発問題に関する論説類が中心であるということである。

(6) 各種の歴史辞典や人名辞典を参照のこと。なお元田の伝記には海後宗臣「元田永孚」(一九三二年、文教書院)がある。また元田文書については、後掲の『元田永孚関係文書』の「解題」が優れている。

(7) 本稿一七ページ。

(一) (明治七年) 四月二日付安場保和宛元田永孚書翰

先月六日御途中其後十八日・廿四日三度之芳翰一々相達、忝々拝読仕候。愈御清健被成御着県御満堂御揃、益御安康之段珍重奉賀候。早速拝答可仕候処、疎懶押移是迄失敬御海容可被成下候。拙家も皆々無異罷在御休襟奉希候。

岩公江之御建言御一封廿一日午後相達、廿三日ニ参達仕候処、御来客ニ而御逢者無之取次ヲ以相達し置申候。御草稿茂御添被成下、桜井ニも披見致サセ候積との御示諭ニ付、入披見候而意見ヲ乞一夕講習仕候処、固より感服御同心之事ニ御座候。然シ元老院一条桜井少々存慮有之、小弟ニも御一別後猶再案段々不安意之条件も有之、桜井存意と大概同案程ニ有之候へ共、急ニ御取遣も出来不申御建言者其儘差出申候。尤廿六日ニ岩公御面会致し御建言之御趣意ハ御領掌ニ而、得斗御熟慮可被成との事ニ有之候間、小弟存慮固より御同案ニ御座候得共、少々懸念之ケ処も有之候段粗申上候処、当時段々御熟慮中之御事ニ御座候段御申聞ニ而余程御反顧之御様子ニ相見へ申候。左候而大藏長官等参議中人物之愚評ヲ御下問ニ付、小弟儀寡聞淺見他之事ハ謙遜致し候得共、彼一人者実ニ関係も大ナル事ニ付御高論ヲ継キ候而十二分ニ言上仕候処、大ニ御同意之御模様ニ相見へ申候。右元老職一条之愚案別紙ニ記し供御一覽申候。御賢慮ニ者適し申間敷と奉存候へ共、今一応御示教被下度奉希候。

警視官三人之御撰拳固より御同意ニ奉存候処、實際上ニハ三人一固ニ御撰任急ニ運ヒ兼可申と見込候間、先津田一人岩公へ申上置候。米田家々も言上ニ而條公ニも申立ニ相成申候。当時大警視川路一人ニ而、権大警視三人、安藤・田辺・丁野ニ而容易ニ転任も如何之様子ニ相聞へ、先津田一人丈者相運可申敷と見込ミ申候。依而三人之儀者御建言ニ依而別段之御人撰無之候半而ハ相運申間敷、藤島ニも御伝言被下候由ニ而、同人々承り候へ共是ニも右之趣ヲ以話合、先津田一人申入レ之方ニ致置申候。不惡御聞済可被下候。

米田家者先月五日ニ帰京ニ而益活発々タル談話ニ御座候。熊本二者二月廿日之着ニ而即夜権令へ説諭、翌朝住江へ直對話ニ而沸騰連モ一時ニ鳥散致し、鎌田惣謝罪之名代人とし而米田家ニ参り申候由、一時之動搖ハ大田黒・嘉悦話と

同一二有之候へ共、廿一日（カ）廿五日ニ忽鎮定、夫（カ）佐賀出張大久保内務卿と寢食ヲ共ニし三月二日（カ）発足ニ而帰京ニ御座候。大久保船中（カ）佐賀鎮定迄之儀、惣テ成算通りニ遺策ナク運（カ）候由、米田家ニモ熊本ニテハ快ク一睡モ成リ不申、前後共ニ固ヨリ熟睡も不致候而尽力致し候。精神之段ハ旧県之人ニより賞譽ヲ受ケ候様ニ有之候得共、大久保之精神ニ者其米田家ニも感服致しタルとの話ニ有之、流石天下之柱石、猶更感心致し候。其後之様子ハ相分り不申、高嶋侍従・米田長モ先日一ト先帰京、猶佐賀へ罷越し申候。是者伺事ヲ持チテ参り候由ニ而確説ハ承知不致候へ共、内務卿之見込と大惣督官との見込少々違却致し、右伺ヒニ正院へ罷越候由ニ御座候。少々懸念ニ而何様陸軍長官ニ異論も可有之哉と愚推致し候。猶承り候ハ、可得貴意候。

江藤未タ相分り不申、今日之新聞ニ宇和島へ逃匿之模様ニ相見へ、早々捕縛ニ就キ候様ニ祈り申候。

熊本ニハ渡辺大丞乘り込ミ佐賀応援党精々押詰タル糺間ニテ、鎌田列も平伏ニ及候由、此節者例之党派論も漸ク明白致し大分愉快ニ覚へ申候。右之一条ニ付珍説有之、賊徒隠匿之類探索嚴重ニ而、下津御隠居・米田与七郎・小笠原七郎・沼田勘解由・溝口藏人・白石・岩佐・沢村大八等大丞宅へ御用召ニ而、精々話合ニ而一統朝旨ヲ奉シ候様之示教ヲ命セラレ候由ニ而、御隠居杯中々勇々敷様子ニ相聞へ申候。

濱町様ニ者益御機嫌能、先月九日ニ御着被遊候。御到来も有之乍恐奉安喜候。岩男列貞太共ニも薩陞ニ而追付申上御召出も被為在、一同九日ニ着仕大ニ安心仕候。熊本も米田家一声ニ而鎮定之上、右大丞之处置等ニ而もはや聊之懸念も無之、濱町様ニも何之御配慮も不被為在候と奉恐察御互ニ安心仕候。

津田も県士式百名撰出先月廿日ニ到着致し候。廿八九日迄ニ皆々四等巡查ニ拜命相済申候。今村・山移・岩間・不破源、仮ノ引廻しニテ出張候へ共、皆同様四等巡查ニ拜命致し候。大田黒・嘉悦列も帰県ニ而御示諭之通り暫者誠ニ靜ニ有之候。大田黒者佐賀へ相廻り候間彼地ニ而拜命と被察申候。

御出発前右之御社中へ之御話合孰レ茂異論ニ有之候由ニ候へ共、御早々ニ而意中ヲ尽シ得不申段、後日嘉悦（カ）承知仕候。賢兄ニも少々宛注文も有之候哉ニ承り申候。今少し熟話（カ）も承候心得ニ居申候処、出立致し十分ニ尽し不申残念

二御座候。藤島内々之話ヲ承候処、内務卿懇意之向キニも賢兄事ヲ議論高大との批評ヲ致し候族も有之候由ニ而、藤島二者賢兄前途之事ヲ祈り候所ト大ニ案思居申候。固より御頓着有之事ニハ無之候へ共、小弟ニも藤島中情汲取居候事故同様ニ祈申候。少シ御注目有之度奉存候。

島津從二位公鹿兒島着之上、西郷ニ面会ニ而是迄西郷事ヲ異論ニ存しニ相成候段、謝罪ニ相成、向後者一致ニ相成リ帝室ヲ輔護可被致候ニ付、一同ニ上京ニ相成度との懇々之説論ニ相成候由、西郷も誠ニ意外之感服ニ而有之候由ニ候処、上京之一段者達而相断、当時大久保初メ皆々尽力致し居候ニ西郷自身出候而モ却而邪魔ニ相成リ宜敷無之、西郷ニ於テハ西陲ニ沈伏致し候而モ決而為メ悪敷事ハ致不申候段申述候而御断申候由、右ニ付從二位公ニも急ニ帰京も出来兼候段、子息并檣原ヲ使として朝廷ニ言上ニ相成申候。右ニ付從二位公御召之由ニ而万里小路宮内大輔・山岡少丞勅使とし而去ル世日ト鹿兒島ハ罷下り候。從二位公ニ者上京も可有之候へ共、西郷ハ勅詔ト申ス事ニハ無之由ニ付、西郷上京ハ六ヶ敷見込ミ申候。今少シ御誠意ノ貫徹致し度とのミ祈り申候。

御草稿者講習之為メニ写し取置、御本書者則返上仕候。御落手可被成下候。

桜井へ先日御一封被下候而宮中改正之件々御示諭被下候段、同子ト承知仕候。一夕得斗話合申候筈ニ而、其上ニ而御返事可仕と奉存候。

桜井ニも先月廿日ニ新宅へ引移申候間、御屋敷者受取申候。御道具モ格別無之藤島も居申候間、此節者朝夕見繕候迄ニ而諸生夜々之宿ハ見合セ置申候。此段申上置候。御長屋統一糸モ夫々承知仕候。

御帰り後ニ御土産之品々拝領誠ニく々結構御心入之御品々ニ而御厚情難有幾久敷重宝可仕と奉存候。家内ト厚ク御礼申上度、となた様ニも重々宜敷奉願候。

袴地糸織其外相願候処、大ニ御世話ニ相成御委細被仰下候趣忝々奉存候。嶋屋之便ニ御遣し被成下、賃錢等之事も被仰下夫々承知仕候。未タ島屋も到着致し候哉否承り不申候。相届申候ハ、御紙上之通りニ相心得可申奉存候。袴地モ急キ候ニ而も無御座七八両トニテ手ニ入候へ者、大ニ宜敷奉願置候。家内ト具々も御礼共々宜敷申上候。

右之件々公私取束ね拝述仕候。御推覧奉希候。猶後便ヲ期シ。早々。頓首。

四月二日夜認ム

安場賢兄

東野拝

尚々御老人様御初メ皆々様へ呉々宜敷奉願候。御出府者いつ比之御模様ニ候哉。御掃除共致し御待可申上と奉存候。近日上野ノ桜少々宛綻ヒ申候由、未タ向島などハ当月央過ニ相成リ可申、園中之花も未タ余程日間も可有之、枝垂レ桜ハ少々綻ヒ申候。此段御老人様方へ申上候。

村井ノ書狀昨日相達し壯健之段安心仕候。此節迄ハ返書も届キ不申、門岡ニ茂追々之返書も有之候へ共是モ同様ニ而御序ニ宜敷御伝声奉頼候。再拝。

(二) (明治七年) 三月付「東臈」意見書

再案

元老職ノ任、從二位公以下四名ノ人選、固ヨリ適當スルト雖、大臣・参議ノ外、別ニ一大任ヲ設ケ置クカ故ニ其宸斷ヲ助クルノ実効アリテ

天皇ノ親任益々重キ時ハ其權亦隨テ強ク終ニ大臣・参議ト相抗スルノ弊ナキヲ免レス。若シ其輔翼ノ実効ナク天皇ノ親任ナクシテ、大臣・参議ノ下風ヲ仰キ、其權亦輕キ時ハ新タニ元老職ヲ置クノ詮ナクシテ終ニ無用ノ贅物ト成リ、四名ノ人物モ亦隨テ閑職ニ帰シ、辞免退老ノ外ナク 朝綱亦振ハス。此ニツノ弊、予メ慮ラサルヘカラサルナリ。今四名ノ人物皆宏識大度ノ君子ニシテ、其動作決シテ正院ト相抵抗スルノ患ナク、又決シテ從スルノ属官・門人少シトセス。此輩ニ至テハ其常ニ尊信スル所ノ人、大ニ用ヒラル、ヲ見テハ意氣揚々元老ノ名声ヲ誇張シ、若シ大ニ用ヒラレサルニ於テハ亦必ス不满慷慨、政府ヲ敵視スルニ至ル。是其勢然ルナリ。是亦恐ルヘキ者、予メ慮ラサル

ヲ得サル也。夫元老ノ名アル大老臣ト云シカ如シ。故二位ヲ以テスレハ大臣ノ外ニ元老アルヘカラス。人物ヲ以テスレハ條・岩両公、西郷・大久保ノ外ニ元老アルヘカラス。之ヲ次ニシテ從二位公及ヒ木戸及ヒ勝・大久保一翁ナリ。是恐クハ天下ノ確論倒置スヘカラサル者、故ニ今其名ニ順ヒ実ヲ責メテ、條・岩両公、大久保・木戸ノ四人ハ本官ヲ以テ、元老職ニ任シ、西郷・從二位公及ヒ勝・大久保一翁ハ專ラ元老職ニ任シ、兼官ノ元老ハ三日ニ一度或ハ五日ニ一度帝室ニ朝シ、專任ノ元老常ニ

帝側ニ在リテ輔翼ノ任ヲ尽サハ大臣元老ノ權相分ル、ノ患ナク、協同和合シテ其器度名望亦以テ天下ノ人心ヲ繫ルニ足ラン歟。且人ノ情相逢フノ近キヨリ愛親ノ情生ス。今

天皇君臣水魚ノ親愛アランヲ希フ者誰々ソヤ。條・岩両公、大久保・西郷ヲ措テ二等ノ人ニ求ムヘカラス。故ニ天皇此四賢ニ相逢フヤ、最近ク最切ナランヲ欲センニハ元老ニ任シテ数々

帝室ニ密通セサルヘラカラス。是衷情ノ親ク望ンテ真ニ希フ所ナリ。況ンヤ去冬征韓兩議相判レシヨリ、人心胸々、方今佐賀平定、天下ノ有志皆頌ヲ延テ 朝政ノ舉ルヲ望ム。是時ニ當リ一度趾ヲ舉テ有志ノ望ニ飽クニ足ラサレハ以テ人心ヲ服スヘカラス。今元老職ヲ置ク天下ノ人、將ニ目ヲ刮テ以テ其人ヲトセントス。然リ而ソ其人ノ擢任ニ至テハ從二位公列ノ四名ノミ。蓋シ西郷ノ名望固ヨリ無論ト雖、其實際受任担当スル否、未タ知ルヘカラス。從二位公・勝・大久保一翁ノ人物二等ニ下ラスト雖、天下ノ望ム所大久保ニ如クハナクシテ、條・岩両公之ニ次ク。此ヲ措テ彼ヲ舉ク即チ

帝室ノ大任輕キニ似テ天下ノ有志其望ミニ歎ザラントス。故ニ拙意謂ク、元老職ヲ置ク、希クハ條・岩両公、大久保ヨリ勝大久保一翁ニ至リ、皆之ニ任シテ可ナルヘシ。若シ又施設シ難クハ姑ク止ムニ若クハナカルヘシ。今 皇宮太政官代道途隔絶事務多端ナリト雖、大臣・參議交ル々々

帝室ニ朝スルニ三日ニ一度、五日ニ一度ヲ以テセハ、從前ノ疎遠ニハ陪從スヘシ。而シテ實際 天皇ノ聖資ヲ察シ 皇宮ノ体度ヲ審ニシ其度ヲ計リ其序ニ順ヒ除ヤクニ体裁上ノ改正ニ及ヒ隨テ元老院ヲ置ン、亦

晩カルヘカラス。苟モ實際上ニ力ヲ用ヒス、徒ニ体裁上ノ改観ヲ急ク時ハ遠カラスシテ又終ニ改メサルヲ得ス。亦將ニ輕々進歩朝變暮改ノ覆轍ヲ踏ントス。是正ニ熟慮セサルヘカラサルナリ。

三月

東臯具陳

(三) (明治七年) 四月六日付安場保和宛元田永平書翰

去ル一日之貴翰一昨四日ニ相達忝々拝読仕候。御全家様御揃愈御安祥被成御座奉拝賀候。此元皆々無異罷在候間御安心可被成下候。其後都下西方之形勢等御懸念被成候段、追々可得貴慮とハ存ながら執筆懶惰押移一ト通りハ二日之郵便ヲ得貴意候通りニ而、未タ確定之儀も承り出し不申杞憂消却之様ニ至り兼申候。尤江藤新平者三日之報知ニ高知県ニ而捕縛ニ就キ、佐賀ニ伝送ニ相成候趣ニ而昨日米田家之聞取ニ而承知仕候。其外之面々も捕縛之段ハ昨日之新聞紙ニも相見ヘ居申候通りニ御座候。先巨魁皆逮捕御処刑一ツニ相成リ何様魁首者嚴刑、其余者御寛典之御処置ニ可相成と被察申候。昨日岩男之書翰到着同氏ニも佐賀ヘ出張実地見聞之處、兵火之跡直様御救助建築等之指揮行届候段申越、王師之姿相顯レ感心之趣ニ御座候。御処刑輕重宜ヲ得候様之建言も致し候由ニ候處、既ニ内務卿ニハ定論有之候趣ニ而、一々岩男之建言通りニハ運ヒ兼候模様ニ有之、定而内務卿ニ定見有之候と相見ヘ申候。九州巡視ハ惣督宮計ニ而内務卿ハ巡回ハ無之見込ニ御座候。いつれ巨魁処刑之上者早々帰京終始之事実奏聞叡慮ヲ可奉安との忠志ニ可有之哉と奉存候。

元知事様御着後之御模様ハ精敷儀ハ未タ報知承り不申候ヘ共、先得貴意候通りニ而何も静謐ニ相成リ候上ニ而之御着座ニ而御配慮之儀も不被為在候事と奉恐察候。御安心可被成下候。

台湾御征伐御決議ニ而昨日西郷陸軍大輔惣督被仰付、今日ハ出發之由ニ御座候。野津少將・谷少將兩人將師ニ而鹿兒

島唄之壯兵ヲ募られ鎮台兵も發出致し申候。初而承り候処ニ而ハ如何之廟議ニ候哉と杞憂之至ニ御座候。近日之御急決ニ而全ク機密ニ出候事と小生共耳遠く有之候へハ別而驚キ申候位ニ而内務卿ニも同意否も難計と重々懸念仕候処、米田へ咄見候へ者内務卿二者佐賀出張之節船中ニ而既ニ其内話有之佐賀一時ニ鎮定之上者台湾ニ差向候との内話も有之候由ニ御座候。右之次第承り候得者、廟議内決ハ内務卿策略之内ニ有之候ニ付先々杞憂ヲ慰シ申候。

人力車御求メ被成度との儀ニ而小生長屋之車製ニ被成度趣、い才承知仕候。則音吉へ申付製造方へ承合せ候処、別紙直段書之通ニ申出候。所々承り合せ候ハ、少々宛之高低ハ可有之候へ共、先式拾金内ニ而出来可致、右之御聞置ニ被成置候ハ、直ニあつらへ可申と奉存候。代金ハ少しも御心配無之様御世話ヲ奉願候。糸織類之代金モ小生が差出候筈ニ御座候間、彼是御立用モ相願可申、旁其心組ニ被成置被下候ハ、忝々奉存候。

右糸織類之儀者御袋様御奥様大ニ御世話ニ罷成り難有、今日陸運社が相達し慥ニ受取申候。屑糸織・白紬注文通りニ而大ニからも好ク小生妻共に誠ニ難有、糸織者思召付ニ而御遣し被成下、品からと云別而宜敷思召之処兩人共ニ誠ニ御礼難申上尽奉存候。妻がハ別段御礼も申上候心得ニ而、先日が文をも差上候筈ニ御座候へ共、此間が時候替り故例之持病差起り頭痛強く打臥居申候而存ながら御礼も不申上本意ならず御無礼申上候間、呉々も小生が宜敷申上候様申出候。

去月廿三日が者雪ニ而其後雨ニ相成御困却被成候処、一日二者晴ニ而梅御覧ニ御出浮被成候由御鬱散ニ相成可申と奉遠想候。此元者近日者天氣暖和二赴キ桃桜咲出テ、昨日上野迄参り見候処もはや八分位之開花ニ而大分人出も多く賑合申候。八九日比盛り歟と被思向島者未タ少し早く十三四日比ニも可有之歟と存し申候。御地とハ余程之相違ニ而景況想像仕候。御出府も如何之御模様ニ御座候哉。折柄随分御自愛御專一二奉折候。一昨日之貴報旁如此御座候。頓首。

四月六日

安場賢台

永孚

尚々此節モ村井・門岡へ紙面届兼申候間御逢之節可然様頼候。再拝。

(四) (明治七年) 四月十七日付安場保和宛元田永孚書翰

平信要答

去ル十一日發之芳翰一昨十六日到着辱拜誦仕候。御闔堂益御安祥之段珍重奉拝賀候。御地も漸春和相催候段、御母堂様ニも花御覽等御樂も可有御座と奉想像候。再案愚見猶御再答御別紙御明辨拜誦感服仕候。一応拝見之処ニ而ハ最早再々答も無之次第第二御座候得共、宸断補佐之一条今日不_レ為_レ則_レ已_レ苟_レ為_レ之、則器量名望決シテ第二等ニ落スベカラス。且行政・議政ノ權分タザルベカラスト雖、宸断補佐ノ大臣ニ限り行議兼任セザルヘカラス。李ノビスマルク、英ノ師輔宰相等其權ノアル所如何ヲシラズト雖現今ノ朝廷上ニ於テハ行議兼任ノ大臣ヲ以宸断補佐ノ任ニ充テ而ソ其己下其權ヲ分ツベキナリ。故ニ愚意謂フ、タトヒ他ノ人物ハ此選ヨリ落スヘキ氏、條・岩両公、内務卿ノ三名ハ除クベカラス。且タトヒ實際上ノ補佐専ラナザルヲ免レザル氏、元老大臣ノ名義斯三名ヲ置テ他ニ冠セシムベカラス。是大ニ高明ニ悖ルト雖モ未タ再案ノ意思幡然タル能ハザル所ナリ。猶熟考ノ上鄙意ヲ可聲、桜井ニも拝見致サセ意見ヲ乞ヒ可申一応之拝答仕候也。

佐賀ノ巨魁江藤・島己下十名刑罪相濟ミ候へ者、内務卿モ近々帰京可有之との模様ニ有之、地方ノ會議等茂其上ニて之事と被察、小生耳二者未タ何とも承不申候。

江藤刑罪一条も都下ノ議論例之生_レ西洋流ノ説も有之由ニ候処、速ニ斬臬ニ処セラレ遺憾も無之候。此己後ハ只々内治之御運歩專一二奉折候。

台湾一条御高論ノ如ク緩急輕重其当ヲ得候処ハ何分愚意安シ不申、内務卿ニも定而異論ニ可有之哉と相考へ、実ニ天下之大事と杞憂無涯存候処、内務卿者初メヨリノ胸算と承り候へ者先夫々者安心仕候。

都下ノ景況格別承り候儀も無之、近日岩公ニも一兩度參殿致し候へ共、細カナル事ニハ亘り不申、津田権大警視ニ選任之事も余程申達し候へ共中々運ヒ不申候。岩公ニハ至極御同意ニ候へ共警視庁當時人員盈チ居且外ハ飛入ハ中々容易ニ難相成議論ニ有之候由、残念ニ御座候。

元知事様ニ者益御機嫌能、彼地も弥以靜穩ニ而御配慮等モ無御座由、御帰京も大概此十五日過ル彼地御発軔之御内慮ニ被為在候よしニ伝承致し候。未タ御治定ニてハ無之由ニ御座候。御留守ニも御異條も不被為在今戸モ御同様ニ而奉恐悦候。

熊本ハ倅来状昨夜着致し候処、下津末喜御養子ノ御内談御隱居承リニ相成候処、存寄も無之御所望ニ任せ差上可申との事ニ御座候段、庄村一郎ハ倅へ申聞ケ候由ニ御座候。然処右御内談相濟候而ハ直ニ登京致サセ可申哉否之儀、御母堂様御初皆様之思召如何ニ御座候哉、小生ハ御聞合を申上御返答之趣早々申越呉候様との頼ミニ御座候段、倅ハ申越候間此段得貴意申候。先々御安心可被成、於小生も重々太慶奉存候御模様被仰下候ハ猶彼方へ郵便ハ可申遣と奉存候。

人力車者直ニ注文致し置明後日比ニハ出来ノ筈ニ御座候。出来参り候ハ暫者御預り置、好便ニサシ出可申候。代錢ハ反物代と御立用仕置、追而過不足ハ御算用可仕と奉存候。

家内持病御尋被成下難有、此節者久々ニサシ起リ大分長引致し候処、近日者大分快く相成り漸床より起上り申候。乍憚となた様ニも呉々も宜敷く申上候。

此節者右末喜一条ヲ申上候為メニ一筆サシ上申候間、外之御返答者誠ニ略々拝呈仕候。猶後便ヲ期シ早々頓首。

四月十七日

東野

安場賢台

尚々随分く御自愛專一二奉祈候。何も早々御出京奉待候。太田黒モ佐賀県参事之心得ヲ以相務候との拝命ニ有之

候由珍重ニ御座候。岩村権令ハ当時旧県ハ参り居候よしニ而当分ハ太田黒全権と相見ヘ追而ハ上進之都合ニも可有之哉と相考ヘ申候。後便ニ讓申候以上。

村井・門岡ヘ此節も書状届兼、御序ニ可然様奉頼候以上。

(五) (明治七年) 十二月十三日付安場保和宛元田永孚書翰

(朱書) 十二月十七日午前着。即日返書出ス。

一輪拝呈仕候。寒霜相増其御地如何三層之寒威と想像仕候処、御母堂様初御全家様益御安祥可被成御座、珍重奉拝賀候。此元ニても拙家無異消光御安着可被成下候。先便呈書之御報酬も夫々拝誦仕候。貴論之通支那一条無比之運ニ至リ、皇国之光輝生靈之幸福、実ニ無涯之賀悦、言詞ニ難尽次第、電報已後之情報より辦理大臣帰期迄之間休也翁初相会候。度々賀辞不申事ハ無之、其度毎二者賢兄御事御噂不致儀ハ無之候得者、幾度歟筆ノ硯ニ差臨ミ候ヘ共、山田・安田ガ一々達貴聴置候由ニ候間、夫ニ相讓候而本意ならず失敬仕候。其後御運ヒ之御模様ニ付而ハ御賢慮之趣被仰越、山吉参事も出張ニ而有之、一々御尤ニ奉存候。内務卿帰期後、内外繁務之由ニ而此後御運ヒ出し之都合如何とも承り不申、天下掛目相待居候事ニ而何分渴望之至ニ御座候。

休也翁事追々御承知被下候通りニ而素懷言上之上者、嚴寒ニ差向キ不申内ニ速ニ西帰、可然儀ハ御社中同論ニ候ヘ共、未タ言上之筋モ相残り居、其運ヒニ至リ兼申候。尤條・岩二公ヘ之言上ハ相済、左府公ニも一面会ハ有之候ヘ共、未タ素懷之言上ニ至リ不申、度々参殿ニ相成候ヘ共御所勞彼是ニ而遅延ニ相成り居、此言上相済候上ニ而ハ猶又三大臣御一席ニ而御談席ヲ被設候事、已ニ條・岩二公ヘ御約定モ有之居、必ス其御都合ニ相運ヒ可申ト奉存候。大久保卿ニも面会之筈ニ而、虎殿ガ申入ニ相成リ、近々ニハ其都合ニ相成リ可申候。條・岩二公ヘ之言上振りハ同座ニ而承り居、

十二分之言上至極宜敷、流石ニ老輩之誠意精神ノ洒ク処ヨリ二公ニも靈懷御受之御面色ニ相見ヘ申候。大久保ニも極メ而話合も宜敷可有之被察、建言御採用実地御運ヒ之次第ハ如何ニ候ヘ共、社中耆人之老先生積年之誠心、廟堂上ニ表白ニ相成候段ハ御互ニも安喜候事ニ御座候。右相濟速ニ帰郷ニ候得者、誠ニ全備之出処進退ト相考ヘ、翁ニも其覺悟ニ御座候ヘ共、小生共ニも其機ヲ抜カサス愚言モ奉リ候半ト相含ミ居申候。此儀者未タ極内々ニ候ヘ共、條公之御模様一ツニハ天顏拜謁之都合ニも相運ヒ可申哉、是亦翁之誠心次第之儀ニ而、脇々々決而周旋等可致事ニ無之候。先々御内聞ニ被成置可被下候。

村井事遂ニ辭職之都合ニ至リ、先達而門閭内狀ニ而承知仕、賢兄御配意之趣ニ而、先々辭職も相濟、当人モ安心之由ニ而、去ル八日ニ着致シ直と話モ承リ御伝言モ拝承仕恭々奉存候。最早致し方も無之、速ニ帰隱之外無之、既ニ昨十二日御元發致シ申候。折角之御知己ヲ受ケ候而三百里外より出張致し候ヘハ、愚不肖事成否ハ度外ニ置キ一幕者知己ニ酬ク之勉力致し候覺悟こそ当然ニ候処、着県即下退避之都合、遂ニ此節之辞免ニ至リ候段、其身ハ種々之意思も有之候ヘ共、於小弟ハ不同意之次第ニ御座候間、着日面談休也翁同座ニ而其面責も致し申候事ニ御座候。然しもはや既往之事強而咎メ候訳ニも無之、多年別懇之交友中ニ而如何ニも遺憾不少御察シ可被下候。就而ハ賢兄始終之御配慮於小弟実ニ御氣ノ毒千万ニ奉存候。何も御面話ならては難尽、門閭も段々心配も致し候由ニ付、返書旁一書進呈之筈ニ候ヘ共、此節迄ハ届兼、御序ニ宜敷御致声奉頼候。

猶言上之儀ハ不尽ニ候ヘ共、此節も先右迄拝呈仕候。余者後音ニ譲り置申候。頓首。

十二月十三日

永孚拝

安場賢兄

尚々御家内様方ヘ乍憚宜敷く奉願候。妻病氣も先漸々快キ方ニ而、乍憚御懸念不被成下候様、是方も呉々も宜敷く申上度申出候。再拝。

〔六〕 (明治十三年) 十二月十三日付下津休也宛元田永孚書翰

爾來契濶不本意失候仕候処、山田帰県ニ付一翰拝呈仕候。寒霜相催候処益御安泰被成御座奉賀寿候。御怪我之儀モ誠ニ御危キ御事ニ而此元よりも大ニ御氣遣申上候処、漸々御平癒ニ被為至御外出も被出来候様ニ被為至候段者実ニ目出度万祝仕候。併御本復ニ者難相成由御不自由之事者申上候ニ不及深く奉推察候。尤御元氣者益以御壯ニ被成御座候由ニ而奉安心候。乍此上御用心御專一二奉祈候。遠隔候而御見舞も届兼候次第深く汗脊仕候。内先之頃者何より之するめ沢山御惠賜無存懸忝々仕合御厚情奉感謝候。此元ニ而者此大するめハ容易ニ無之品ニ而御心入別而難有荊妻共殊更好物ニ而深々難有かり申候而厚ク御札申上候。此節者幸便故何そ差上度候へ共、心付も無之例之鐘詰少々御笑草ニ献上仕候。別封者誠ニ輕少ニ御座候得共、歳末御祝儀之印迄ニ差上申候間、何そ之御用ニ成下度有様、今少シ御弁利ニ相成候様ニ致し候而御養老之一助ニもと存居候得共、親類中ニも未タ心ニ任せ不申程ニ而、年來御報恩之心事を尽し得不申御賢察奉願候。山田出京ニ而県内之様子モ精敷承知仕、此節各派一和之都合実ニ多年之氷雪一時ニ解融致し候様之思ひをなし尊大人積年之御苦慮始而御安悦ニ至り申たると御同慶ニ奉存候。此元從三位公ヲ初メ奉り、米田・安場皆々之大慶無比上事ニ御座候。此節之一和者独り吾党之喜びのミニ無之、熊本満県之幸福、熊本一県之幸福ニも無之、実ニ天下之關係不淺少事ニ而政府中ニも余程之満足ニ有之、此好氣運全国ニ及候へハ天下安治無疑、是全ク道德学之影響ニ相違無之と御同慶仕候。い才者山田ハ御聞取可被成候ニ付略仕候。其他此元之景況者同人ハ言上仕候ニ付何も録上不仕候。

迁生儀モ無異ニ奉職罷在、当年共者別而元氣も宜敷不相替恩寵ニ浴し難有事ニ御座候。御放念奉願候。別紙尊大人之御座下迄ニ録呈仕候。御他見者堅ク御断申上候。余者奉期後音候。謹言。

十二月十三日

蕉雨尊大人 座下

永孚

尚々次第ニ寒氣モ強ク相成、年内モ相逼候ニ付、別而御自愛奉懇祈候。再拝。

三白妻よりも乍憚重々宜敷く申上度、不断御噂者申上候へ共存上候通りニ御見舞も届兼候次第御諒察奉願候段申出候以上。

〔附記〕

本校作成に当たり、財団法人永青文庫、熊本大学附属図書館、安場保吉氏に大変お世話になった。記して謝意を表したい。